

19世紀前半におけるフランスの知識の普及書 (2)

Les Livres destinés à la diffusion des connaissances en France dans la première moitié du XIX^e siècle (2)

小山美沙子

Misako KOYAMA

はじめに

本稿は、『名古屋外国語大学論集』第2号(2018年2月)において、研究ノートとして発表した「19世紀前半におけるフランスの知識の普及書(1)」¹⁾の続きである。筆者は、フランスにおける19世紀前半の女性のための知的啓蒙書出版の背景の把握のために、当時の知識の普及書出版の概況についても調べを進めており、先の研究ノートでは、フランスにおける当時の書物の出版状況、知識の普及書の興隆、読者層を意識した知識の普及書の出版に焦点を当てて概略を示し、前世紀との連続性と更なる発展の状況を指摘した。

本稿では、更に、そうした知識の普及書の在り様を、総覧の野心と簡明さ、版型と挿絵、叙述スタイルという観点から光を当てて検討を加えておきたい。こうした観点は、既に筆者が前世紀の知識の普及書を検討した際のチェックポイントでもあり、啓蒙の時代の知識の普及書の特徴が次の時代にどのように継承されていたかを知る手掛かりとなりうるものである。

1. 総覧の野心と簡明さ

筆者は既に、18世紀の知識の普及書に見られる「総覧の野心」と「簡明さ」への配慮という特長に注目してきた経緯があるが²⁾、これも又19世紀に引き

継がれる。

事実、19世紀は、Diderotによる*Encyclopédie*の出版が百科全書的な書物の出版(しかも、このタイトルを付けて)を流行させた³前世紀の後を受けて、百科事典の出版が相次いだ時代である。Roretの叢書は、「une encyclopédie」を構成するものであった。これ以外にも、Duckettによる*Dictionnaire de la conversation et de la lecture* (in-8°, 52 vol., 1832-1839) や、Bailly de Merlieux (1800-?) の編集による「Une célèbre collection⁴」である、Roretの叢書と同類の*Encyclopédie portative* (in-32, 54 vol., 1825-1830?)⁵といった一般向けの書から、「特に学生」向けに編まれ、社交界人士なども読者対象とする*Encyclopédie des jeunes étudiants et des gens du monde* (in-8°, 2 vol., 1833-1834)⁶、子供用の*Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse* (in-12, •1801) まで、様々な百科事典が出版された。特に、最後の子供用の百科事典(テーマ別の総合学習書になっている。)は、1825年に第13版(フランス国立図書館所蔵)が出るほど好評であった⁷。

Duckettの膨大な辞典は、出版・発売元であるBelin-Mandar et Devauxの1832年のカタログ広告(フランス国立図書館所蔵)では、「RÉPERTOIRE DES CONNAISSANCES USUELLES, DICTIONNAIRE DE LA CONVERSATION ET DE LA LECTURE」という大見出しで紹介されており、Duckettは、ここで、「le résumé de tout ce que l'esprit humain a acquis en connaissances positives depuis trois mille ans⁸」を読者に提供する意図を表明している。

又、ギリシャ人が最初に、「ouvrages portatifs contenant l'abrégé d'une science」に対して用いたとされる「manuels⁹」という呼び名が、Roretの百科叢書(in-18のサイズで、各巻300-400頁¹⁰)には付されていたし、*Encyclopédie portative*も、*Résumé universel des sciences, des lettres et des arts, en une collection de traités séparés*という副題を持っていた。先の子供用の百科事典ですら、「Abrégé de toutes les sciences」という副題が付いているのである。レベルや規模などの異なるこれらの事典を同列には扱えないが(実際、子供用を除いて、膨大な百科事典になっている。)、少なくとも、百科の知識を網羅し、それをできるだけ簡潔に統合しようという方向性にあったことだけは、確かである。

ところで、普及書は、専門家ではない一般の読者に対して、必要な知識を分かり易く提示する必要がある。百科全書的な叢書においてさえ、そうした配慮が表明されていた。

例えば、Bailly de Merlieux は、Roret の叢書のひとつ、*Manuel de physique, ou Elémens abrégés de cette science, destiné aux gens du monde et aux étudiants* (in-18, 1825)¹¹ の著者でもあるが、その第6版(1834年)の前書きで、本書について次のように言っている。

« Le but de ces élémens est donc d'offrir un abrégé de la physique telle que ce mot est limité, développé, défini dans l'Introduction. Donner aux gens du monde, aux personnes qui dirigent leurs recherches humaines, à tous ceux qui veulent avoir une teinture de la science, une idée assez exacte, une explication assez complète des phénomènes naturels, faire cet exposé aussi clairement, aussi simplement que possible, sans secours des mathématiques, en s'appuyant seulement du raisonnement et de l'expérience; tel a été le but constant de nos efforts¹². »

基礎知識を、単純明快に解説するというのが、普及書の要件であることを、著者は良く理解していたのであった。基礎とはいへ、かなりしっかりした内容であるが、実際、数式の類いは脚注に留め、順序立てて知識を提示している、明快なフランス語で解説をするよう配慮がなされているのがわかる。

同様に、*Encyclopédie des jeunes étudiants et des gens du monde* の序文も、本書で「*les principes élémentaires de toutes les sciences qu'il importe le plus de connaître*」を統合することを目指したとし、読者が、本書の中で、「*des notions claires, précises, et dégagées de l'appareil des phrases inutiles, sur tous les objets qui se peuvent rencontrer dans le cours de la conversation*¹³」を見出だすことになるとしている。あらゆる学問を対象にしながら、必須の基礎的知識を、簡明に提示するという意図が示されている。本書は、明快なフランス語で書かれているが、2巻本という規模を考えれば、基礎的な事典としては、それなりに良くできた普及書である。

又、*Encyclopédie portative* は、1842年の出版報には、「collection de Traités élémentaires sur les sciences et les arts, l'histoire et les belles lettres¹⁴」とあり、「基礎的」な百科叢書として紹介されている。事実、この叢書のひとつ、*Résumé complet de botanique* (in-32, 2 vol., 1826)¹⁵の序で、著者は、「Ainsi, notre *Résumé de botanique* ne renfermera pas la description de toutes les plantes, tandis que les connaissances élémentaires nécessaires à l'intelligence des descriptions, y seront exposées avec détail¹⁶」と、全ての植物を扱うのではなく、本書の記述の理解を助ける基礎的知識の説明を重視していることが示されている。実際、植物の種類よりも、植物学そのものの基礎知識が、植物学の歴史に始まって、系統的に解かり易く解説がなされている。更に、「Quant aux personnes qui ne cherchent qu'un délassement dans l'étude des plantes, nous avons tâché de les satisfaire en dépouillant le sujet de l'aridité d'une terminologie trop compliquée¹⁷」とあるが、専門用語は、必ず易しい言い換えや説明を伴って使われ、第2巻の巻末には、専門用語の語彙集まで添えられており、丁寧な作りになっている。

一方、*Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse* も、その前書きで、「nous nous sommes attachés à donner de l'étendue aux sujets qu'il faut principalement posséder, tels que la Cosmographie, la Géographie, l'Histoire naturelle, l'Histoire, la Mythologie, la Grammaire, les Religions, etc. [...] nous n'avons donné que de simples définitions des autres sciences¹⁸」とあり、確かに、子供達が習得すべき主たる基礎科目に重点を置く編集方針が貫かれている。そして、「nous avons adopté un plan qui présente toutes les connaissances humaines dans un ordre aussi naturel que régulier¹⁹」としているように、知識の内容は、系統的に段階を踏んで無理なく提示されて行くのである。扱う内容に優先順位をつけ、系統性や段階性を重視した知識の整理統合を図ることで、無駄のない、より明快な普及書ができあがったのであった。

2. 版型と挿し絵

書物の版型の小型化の現象は、知識の普及書にも及んでいる。前世紀の再版ものは勿論のこと、19世紀に初版が出た普及書の場合も、本稿でこれま

で挙げてきた普及書の具体例が、手軽な小型本を(時に、18世紀には一般的でなかったよりコンパクトなサイズで)出版する傾向にあることを示している。とりわけ、Roretの叢書がin-18を、*Encyclopédie portative*の叢書がin-32²⁰を採用している例は、一般用の百科全書的な事典にまで、こうした現象が広がりを見せていることを示唆している。

挿し絵(本文の内容とは関係のない、巻頭や巻末の飾り絵は除外する。)については、前世紀のような、別刷りの図版を挟み込む形式は、引き続き採用されていた。M. Melotは、イギリスで発明された、本文と挿し絵を同じ頁に印刷することを可能にする新しい印刷技術が、「1820年代にフランスで広まった」としているが²¹、イギリスで出た書物の翻訳書は別にして²²、純粋な国内版では、一般に普及していくのは、やはり、七月王政時代である。

例えば、*Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse*は、判明している最後の版である1825年の第13版になっても、図版(2枚の地図を含めた計11枚)を本文に挿し挟む方式が採られた²³。一方、七月王政時代に出版されたDuckettの百科辞典にある若干の挿し絵は、本文に組み込まれている。又、Capuronの医学・理科学辞典、*Nouveau Dictionnaire de médecine, de chirurgie, de physique, de chimie et d'histoire naturelle* (1806)は、後に、Nysten (1771-1818)らによって増補改訂版が次々と出たが、1841年の第8版から本文中に挿し絵が付き、第9版もこれを踏襲することになる²⁴。

しかし、復古王政時代から出版が開始されたRoretの叢書では、1862年のカタログに、「La plupart des volumes [...] renferment des planches parfaitement dessinées et gravées, et des vignettes intercalées dans le texte²⁵」とあり、この時代になっても、新旧の挿し絵の方式が混在していることがわかる。

又、人気を博したDemoustierの*Lettres à Emilie sur la mythologie* (1786-1790)の場合(再版もの)は、19世紀前半の版(1801-1845年)については、フランス国立図書館と本稿筆者が所蔵する計31版中、図版があるのは21版にのぼるが、七月王政時代の2版を含め、全て、旧来の図版を綴じ込む方式によるものである。尤も、同図書館所蔵の1859年と1883年の図版付きの版も、同様の方式が採用されている。

ところで、Demoustierの書は、少なくとも初版には、もともと、口絵を含めた図版は付されていなかった。フランス国立図書館所蔵の18世紀の7版(国内版)のうち、巻数が揃っている版は3版だけなので正確なことはわからないが、図版があるのはわずか2版で、それも口絵に限られていた。しかし、Demoustierの書は、19世紀前半の上記の版のうち、図版の数の合計が24枚以上のものが7つあり、最多は、1818年の全集に収められた版(6 vol.)の計62枚に及ぶ²⁶。神話という物語性のある内容であるから、読者の理解を助けるためだけでなく、楽しませる効果が狙われたことは間違いない。

ところで、本稿筆者架蔵の先の医学・理科学辞典の第9版(1845年)の编者による前書きは、「Dans cette édition, comme la précédente, de nombreuses figures, gravées avec une scrupuleuse exactitude, et intercalées dans le texte, donnent un nouveau prix à cet ouvrage, particulièrement destiné aux élèves, et en même temps favorablement accueilli par les gens du monde curieux de connaître les mystères de l'organisation du corps humain et des diverses classes du Règne animal」という言葉で結ばれている。挿し絵が、学生の勉強や、社交界人士の知識欲に応える有効な手立てとなることを、编者は意識していたのであった。普及書が、必ずしも挿し絵を伴うわけではなかったが、伝統的な手法にしる、新方式にしる、これは、読者を楽しませると同時に、啓蒙効果も高いため、書物のジャンルによっては、教育上の配慮からも²⁷採用されたのであった。

又、プロの編集人が、Chartierによると1830年頃登場したことも²⁸、挿し絵入りの本を完成度の高いものにし、読者の支持を得ることにつながったと考えられる。出版の商業戦略という観点からも、挿し絵は重要な書物の構成要素であったのである。

3. 普及書の叙述スタイル

前世紀、通常の叙述スタイルの他に、catéchismeを模倣した問答形式や、文学的な形式が採用されることがあった。又、女性用を含む再版書もこうした形式を持つ普及書の中に、19世紀になっても読者を獲得し続けたものがあった。勿論、19世紀に新たに出版された普及書においても又、オーソドックス

な解説形式の他にこの形式が採用されることがあった。

問答形式は、まず、子供用の基礎的な普及書に使われ続けた。先の *Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse* は、その代表的な例である。本書は、問答形式による総合学習書になっている。前世紀にもあったように、「D.」の後に質問が、その解答が「R.」に続いて無駄なく展開されている。又、これより簡略な同様の子供用百科事典、*Petite Encyclopédie des enfans* (1836)²⁹ も、同じ問答形式を採用している。これは、1850年に第6版、1873年には第12版が出ており、好評であったと思われる。この他、初等学校の教師であったCoffignyによる、フランス語の基礎的な文法書、*Elémens de la grammaire française, par demandes et par réponses* (1828)³⁰ も、この形式を採用しているが、著者は、「des enfans de la campagne」には、「des élémens très-simplifiés」だけがなくて、「des choses intelligibles et faciles à graver dans leur mémoire」だけを与える必要があると考へたのであった。そして、「C'est pourquoi j'ai fait des cahiers de Grammaire française en forme de demandes et de réponses; après en avoir reconnu l'utilité et selon l'avis de personnes éclairées, je me suis ensuite décidé de les faire imprimer³¹」(下線は、本稿筆者による。)と、本書刊行の経緯を語っている。Coffignyは、その教育的効果をはっきり認識して(恐らく教育の現場で)、この形式を採用したのであった。

ところで、知識の要点を把握し、記憶するのに有効な問答形式は、19世紀、バカロレア受験や、初等教員能力資格試験のためのマニュアル本にも採用されている。例えば、Tisserandの *Traité d'arithmétique algébrique, contenant toutes les réponses aux questions d'arithmétique et d'algèbre exigées pour le baccauréat ès lettres et ès sciences* (1827) は、バカロレアの試験科目にある数学の基礎の口頭試験に対応するための受験参考書である。「M.」(「Maître」の略)と「E.」(「Elève」の略)による、問答形式で、順序立てて必要な知識が提示されている³²。又、Lamotteらによる *Manuel des aspirants aux brevets de capacité* (1837) は、初等教員能力資格取得のための口頭試験用のマニュアル本であるが、科目毎に、想定される質問が、番号順に予め全て巻頭に列挙され、その後で、やはり科目毎に、質問に照応する番号を付けて解答を示している。これは、

正解できなかつた問いをチェックしておけば、後で迅速に見直すことができ
て便利である³³。

一方、文学的な形式も引き継がれていった。Scoppaの*Elémens de la
grammaire italienne mis à la portée des enfans de 5 à 6 ans* (1811)は、無味乾燥
な問答形式ではなく、「Maître」と「Ecolier」の演劇風の対話形式によって、
個人レッスンの現場を再現し、より親しみ易い学習書になっている³⁴。又、
Madame Gorsasの*Les Veillées d'une mère, ou Entretiens instructifs sur toute sorte de
sujets historiques et moraux* (1848)³⁵は、Madame Le Prince de Beaumontの一連
の対話形式の書を想起させるものである。但し、Casimir (12才位)とその妹
Mathilde (9才位)を導くのは、女教師ではなく、母親である。本書は、第二帝
政時代、少なくとも11回版を重ねる程人気を博した。その他、Bretonは、も
う少し年長の若い人達を始めとする、万人向けの対話形式の総合学習的な普
及書、*Les Savans de quinze ans, ou Entretiens d'une jeune famille, sur la géographie,
l'astronomie, l'histoire naturelle en général, l'histoire des insectes, la botanique, la
physique, la chimie, les beaux-arts, etc., mêlés de contes moraux, à la portée de tous
les âges* (2 vol., 1811)³⁶を出版した。父親と、その2人の子供達(男女)、甥と
姪(いずれも14-15才)の計5人の間で、対話が展開していく本書は、1829年
には第2版が出た。和やかな雰囲気の中に、多様な知識を提示するやり方
の中に、「inspirer à la jeunesse l'amour des connaissances utiles」という、著者の
企てのひとつが実現されていると言える³⁷。

書簡体も又、好まれた形式のひとつであった。Decourcelleの*Leçons de
mythologie, ou Lettres à Mme**** (1807)³⁸と、Bertrandの*Lettres sur les révolutions
du globe* (1824)や*Lettres sur la physique* (2 vol., 1824-1825)では、匿名の
「Madame」宛ての書簡で、「私」なる男性が恭しく、学識への手ほどきをし
ている。又、Durandの*Lettres à Thémire sur la grammaire française, en prose et en
vers* (1829 ou 1830)³⁹は、Thémire (若い娘と思われる。)に対して、同じく「私」
なる男性が、恭しさと共に、もっと親しみを込めた調子で、フランス語文法
の基礎を教える設定になっている。Durandは、序文で、本書を「l'enfant de la
gaîté et de la galanterie」と言い、序文に続く「ÉPITRE À THÉMIRE」で、「belle

Thémire」に対して、「Je dois rendre, pour vous plaire, /Amusante la grammaire/Du très-sérieux Lhomond⁴⁰」等と、詩句形式で言っているが、前世紀の同種の普及書に見られた *galanterie* の精神は、こうした書簡体の普及書の中にその命脈が保たれているのがわかる。

勿論、こうした書簡体の普及書が、19世紀も再版が続いていた Euler の *Lettres à une princesse d'Allemagne* や、Demoustier の *Lettres à Emilie sur la mythologie* の影響を受けていたことは間違いない。事実、Bertrand は、*Lettres sur la physique* の序文で、自身が参照した文献のひとつに、Euler の書を挙げ、「les admirables Lettres d'Euler, qui m'ont été de la plus grande utilité pour traiter de la pesanteur, du son et de la lumière」と言っている⁴¹。又、とりわけ、Durand の書のように韻文詩を交えてより文学的な味付けを施すやり方は、Demoustier の書を踏襲したものである。Baron は、韻文詩を交えた歴史についての書簡体の普及書、*Lettres à Julie sur la guerre de Troie* (1822)⁴² の序文で、「Depuis mon enfance, Demoustier, l'aimable Demoustier, était mon auteur favori; je l'avais relu vingt fois, je le savais par cœur; j'osai marcher sur ses traces: il me montrait de loin le chemin fleuri qu'il avait parcouru, et semblait m'inviter à y entrer⁴³」等と本書を執筆するまでの道程を語っている。これは、Demoustier の影響の大きさが窺える告白である。

ところで、Durand は、*Lettres à Thémire...* の序文で、「La jeunesse veut qu'on l'amuse en l'instruisant」であり、「De tous les sujets à traiter en prose et en vers dans le genre épistolaire, le plus ingrat, le plus rebutant, le maussade, est sans contredit, la Grammaire. Eh bien! voilà le sujet que j'ai choisi pour mon début dans la carrière littéraire⁴⁴」と言っている。たとえ最も面白みのない主題でも、詩句を交えた書簡体形式が、読者を楽しませながら学識へと誘う効果があると著者は考えて、このスタイルを採用したのであった。

前世紀にあった詩句形式も又、引き継がれている。Rochelle の *Code civil des Français, mis en vers, avec le texte en regard* (1805)⁴⁵ がその例である。ここでは、*Code civil* の第1の巻にある人事法(「Des Personnes」)が、左頁の法典の条文(全515条)と、右頁の散文詩によるその易しい言葉での言い換え

が見開きで参照できるようになっている。著者は、序文で、「Je me plais ici à rendre hommage à la mise en vers de la Coutume de Paris, faite par M. Garnier-Deschesnes, ancien notaire, et publiées il y a environ trente-six ans; c'est à son livre que je dois la première idée de mon travail; je lui ai même emprunté quelques vers pour deux ou trois articles qui se trouvaient dans le Code, presque les mêmes que dans la Coutume⁴⁶」と言っており、同じ形式による前世紀の*La Coutume de Paris mise en vers, avec le texte à côté* (1768) から着想を得、借用した箇所まであることを認めていた。

一方、フランス国立図書館に未完のまま所蔵されている詩句形式による極初歩の地理の普及書、*Géographie en vers, ou La France décrite de manière à se pénétrer sans peine de ce qu'elle offre de plus intéressant* (1837)⁴⁷の前書きで、著者のClémentは、「l'expérience prouve que les vers se gravent plus profondément dans l'esprit」であるとしている。それは、詩句が、散文に比べて「présenter les objets d'une manière plus saillante et plus agréable」することができるからであるという⁴⁸。そうした利点を考慮して、著者は本書を詩句の形式で著したのであった。読者を楽しませ、記憶に定着させるのに都合が良いこの形式を採用した普及書の中には、Flécheの*Petite Géographie méthodique de la France, en vers artificiels* (1838)⁴⁹のように、フランス国立図書館が1853年から1873年までに6つの版を所蔵するものまでであった。

このように、19世紀に入って、FontenelleやBuffon、Laplace、Demoustierなどの文学的な味わいのある科学や神話の普及書の再版がなされている一方で、こうした伝統を引き継ぐ様々な普及書が、新たに出版されたのであった。

そして、19世紀におけるBuffonの*Histoire naturelle*の子供向けの簡略版の興隆に代表されるように、文学的な味付けをした平易な科学の普及書は、子供達にまで裾野を広げて行ったのであった。更に、科学の分野だけでなく、例えば、Lamé-Fleury (1797-?)の*Cours complet d'histoire racontée aux enfants* (18 vol., 1829-1844)⁵⁰では、子供の読者に向けて、生き生きと歴史を語る描写が採用されているのである。

おわりに

本研究ノートの(1)で筆者が示した前世紀における知識の普及書の出版状況同様、書物の在り様は、総覧の野心と簡明さや版型と挿絵、叙述形式という点で見ると、百科事典類の出版の広がりや小型版の一層の普及、挿絵の入れ方の進化、子供向けの普及書における叙述形式の工夫など、前世紀の遺産が19世紀にも着実に継承され、あるいは発展を見たことがわかる。

最後に、本稿に続く研究ノート(3)では、男女用の知識の普及書についても簡単に纏めておきたいと思う。

註

- 1 『名古屋外国語大学論集』第2号、2018年2月、第213-227頁参照。
- 2 拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書(1650-1800年)に関する一研究』(溪水社、2010年)の第3章参照。18世紀の知識の普及書や19世紀における再版についても、同拙著第3章及び第4章参照。
- 3 DARNTON (Robert), *L'Aventure de l'Encyclopédie, 1775-1800*, Académique Perrin, 1982, p. 276参照。
- 4 QUEMADA (Bernard), *Les Dictionnaires du français moderne*, Didier, 1968, p. 257.
- 5 BAILLY DE MERLIEUX (Charles-François), *Encyclopédie portative, ou Résumé universel des sciences, des lettres et des arts, en une collection de traités séparés*, in-32, 54 vol., Bachelier, 1825-1830[?]. 出版報 *Feuilleton du Journal de la librairie* (n° 53, 31 déc. 1842)に、全54巻のリストが掲載されており、テーマ別の百科事典シリーズである。本稿筆者手持ちのいくつかの叢書によると、各巻300頁位である。尚、Bailly de Merlieuxは、J. J. Paupailleによるシリーズのひとつ、*Résumé complet de la chimie inorganique* (1825)の表紙の記述によると、「Avocat à la Cour Royale de Paris, membre de plusieurs sociétés savantes, auteur de divers ouvrages sur les sciences」であるという。
- 6 *Encyclopédie des jeunes étudiants et des gens du monde, ou Dictionnaire raisonné des connaissances humaines, des mœurs et des passions, contenant: les principes élémentaires de la physique, de l'astronomie, de la géographie physique, de l'histoire naturelle, de la chimie, de la physiologie, de l'hygiène, de la politique, de la morale et de la philosophie*, par une société des gens de Lettres et de savants, in-8°, 2 vol., Hachette, 1833-1834. 本書の具体的な著者名については、目下の所不明である。本書は、アルファベット順に項目が配列された、総頁数957頁の百科辞典である。本書の序文に、「il[cet ouvrage] sera particulièrement d'un grand secours aux jeunes étudiants」とあり、本書は、まず学生達の役に立つことを狙っていることが示されているが、「les gens du monde」や、「toutes les personnes privées d'une grande bibliothèque」(*Ibid.*, tome 1, 1833, pp. [1]-2)にも役立つとされている。
- 7 *Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse, ou Abrégé de toutes les sciences, ornée de trentes*

- figures et deux cartes, ouvrage élémentaire, par demandes et réponses*, in-12, Le Prieur, ●1801. « 1801 »は、出版報 (*Journal général de la littérature française*, 15 Brumaire, an X, p. 44)での記載年代で、現物は確認できていない。以下本稿では、「●」付きの年代は出版報掲載の年代である。1803年に、増補改訂第2版 (in-12, 451 p., *fig. et cartes*, Le Prieur)、1806年に増補改訂第4版、増補改訂第8版 (●1812年)は、出版申告部数2,000部で、1825年には第13版が出るが、同じく出版申告部数は2,000部であった。序文には、「Cet ouvrage, destiné aux enfans」(4^e éd., Le Prieur, 1806, p. 7)と、読者対象が明記されている。著者は、目下のところ不明である。
- 8 *Catalogue général*, sept. 1832, Belin-Mandar et Devaux 参照。尚、この辞典は、本稿筆者の調べによると、補巻抜きの52巻の総項目数は、約2万項目、本文の1巻当たりの頁数は、443頁(2段組み)である。
 - 9 BUISSON (Ferdinand), *Nouveau Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Hachette, 1911, p. 1223 参照。Buissonによると、ギリシャ語の«enchiridion»がこれに相当するという。
 - 10 *Librairie encyclopédique de Roret*, mars 1862, p. 5 参照。
 - 11 BAILLY DE MERLIEUX, *Manuel de physique, ou Elémens abrégés de cette science, destiné aux gens du monde et aux étudiants*, in-18, XXV-279 p., Roret, 1825。本書は、読者の支持を受け、初版の年に、第2版が出て、3,000部の出版申告がなされた。1836年には第7版が、1839年にも出版がなされた。
 - 12 BAILLY DE MERLIEUX, *Manuel de physique, ou Elémens abrégés de cette science, mis à la portée des gens du monde et des étudiants*, 6^e éd. revue et augmentée, Roret, 1834, pp. 15-16。
 - 13 *Encyclopédie des jeunes étudiants et des gens du monde*, tome 1, p. [2]。
 - 14 *Feuilleton du journal de la librairie*, n° 53, 31 déc. 1842 参照。
 - 15 LAMOUREUX (J.-P.), *Résumé complet de botanique*, 2 vol., coll. *Encyclopédie portative*, Bachelier, 1826。第1巻の出版申告部数は、2,250部、第2巻は、1,200部である。著者は、本書を含め、「いくつかの植物学についての書で、知られた」という。(*Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, X, 1873, p. 125 参照。)
 - 16 LAMOUREUX, *Op. cit.*, tome 1, p. v。
 - 17 *Ibid.*
 - 18 *Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse*, 4^e éd., Le Prieur, 1806, p. 8。
 - 19 *Ibid.*
 - 20 尤も、*Encyclopédie portative*については、in-8°でも出版されたようである。(*Encyclopédie des jeunes étudiants et des gens du monde*, tome 1, art. «ENCYCLOPÉDIE», p. 254 参照。)手軽で、しかも、立派な装丁を施せば見栄えがする大きさであるからであろう。フランス国立図書館も、この判型のものを若干所蔵している。しかし、少なくとも、1842年の出版報 (*Feuilleton du Journal de la librairie*, n° 53, 31 déc. 1842)には、もはやin-32の判型による広告(全巻の内容構成一覧付き)しか掲載されていない。
 - 21 MELOT (Michel), «Le Texte et l'image» in *Histoire de l'édition française*, tome 3, 1985, pp. 337-339 参照。
 - 22 英語版からの仏語訳書である M. Trumer (生没年不明)による *Abrégé d'histoire naturelle*

- (in-18, 2 vol., Toul, 1826)。これは、本稿筆者架蔵の書であるが、本書の原題、原著の出版年代不明である。また、本書は、本稿筆者が知る限り最も初期の、フランスで出版された挿し絵入り(本文の頁に挿し絵が組み込まれた)本である。尚、この訳書は、1828年に第2版が出た。
- 23 *Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse*, 13^e éd., 1825, Le Prieur 参照。
- 24 « Avis de l'éditeur[J.-B. Baillière] » in *Dictionnaire de médecine, de chirurgie, de pharmacie, des sciences accessoires et de l'art vétérinaire de P.-H. Nysten* ; revu successivement et considérablement augmenté en 1824, 1833, 1839 et 1841, par MM. Bricheateau, O. Henry, et J. Briand, 9^e éd., revue de nouveau par A.-J.-L. Jourdan, avec 107 figures intercalées dans le texte, in-8°, J.-B. Baillière, 1845 参照。Capuronによる *Nouveau Dictionnaire de médecine* は、1814年、Nystenによって全面改訂(第3版に当たる。)がなされ、タイトルも変更になった。改訂された本書は、読者の支持を得続け、1865年に第12版が出る。第9版に付されたその後の改訂者は、本書の表紙に記された肩書きによると、Paris大学医学博士であるBriandを除いた他の3人は、王立医学アカデミー会員である。尚、Nystenは、ベルギー生まれの有能な医師であった。(*Grand Dictionnaire du XIX^e siècle*, XI, p. 1178 参照。)
- 25 *Librairie encyclopédique de Roret*, mars 1862, p. 5.
- 26 *Lettres à Emilie sur la mythologie* in *Œuvre de C. A. Demoustier*, in-18, 6 vol., T. Dabo, 1818 参照。
- 27 Melot は、« Le Livre scolaire s'illustre lui aussi, de plus en plus, depuis que certains philosophes et pédagogues, John Locke le premier (1693), puis Pestalozzi (*Comment Gertrude instruit ses enfants*, 1801), ont prôné l'enseignement par le livre illustré »(MELOT, *Histoire de l'édition française*, tome 3, 1990, Fayard, p. 333) と言っている。
- 28 ロジェ・シャルチエ『読書の文化史』福井憲彦編訳、新曜社、1993年、第53-54頁参照。
- 29 Z. C. (M^m), *Petite Encyclopédie des enfans, contenant un abrégé d'histoire, de géographie, de grammaire, etc., à l'usage des maisons d'éducation*, in-18, [III]-117 p., Devers, Toulouse, 1836. 正確な著者名は不明である。*Nouvelle Encyclopédie de la jeunesse* 同様、テーマ別の総合学習書になっている。
- 30 COFFIGNY (C.), *Elémens de la grammaire française, par demandes et par réponse*, d'après les auteurs les plus accrédités, in-12, xvi-212 p., impr. de Denis, Commerci, 1828. 著者については、本書の表紙に、「Instituteur primaire」とあるが、生没年など詳しいプロフィールは不明である。
- 31 *Ibid.*, p. v.
- 32 TISSERAND (Pierre-Antoine), *Traité d'arithmétique algébrique, contenant toutes les réponses aux questions d'arithmétique et d'algèbre exigées pour le baccauréat ès lettres et ès sciences*, 3^e éd., in-8°, XVI-384 p., Langlois fils, 1827 参照。これは、序文によると、*Traité d'arithmétique algébrique, selon la méthode d'enseignement mutuel* (in-8°, 1819)が元になった、*Traité d'arithmétique algèbre, contenant toutes les questions d'arithmétique et d'algèbre exigées pour le baccalauréat ès lettres et ès sciences* (in-8°, 1823)の第2版であるという。目下の所、未確認であるが、初版の段階から問答形式になっていたと思われる。(*Ibid.*, p.

- VI参照。) そのため、「第3版」とされているのであろう。尚、Tisserand (生没年不詳) は、本書の表紙にある肩書きによると、Ecole polytechniqueの卒業生で、「professeur suppléant de mathématique au collège [sic] royal de Saint-Louis」であるという。
- 33 LAMOTTE (L.-Al.), MICHELOT (Auguste-Charles-Jean), MEISSAS (Achille), *Manuel des aspirants aux brevets de capacité pour l'enseignement primaire élémentaire et pour l'enseignement primaire supérieur*, 4^e éd., in-8°, 523 p. et pl., Hachette, 1837参照。
- 34 SCOPPA, *Op. cit.* 参照。本書については、拙稿 (研究ノート) 「19世紀前半におけるフランスの知識の普及書 (1)」の註29参照。
- 35 GORSAS (Madame), *Les Veillées d'une mère, ou Entretiens instructifs sur toute sorte de sujets historiques et moraux*, in-12, 300 p., Martial Ardant frères, Paris et Limoges, 1848. 著者の生没年は不明だが、子供用の読み物を書く作家であったと思われる。尚、対話には、母親の女学校時代の女友達とその娘なども、後で加わり、変化を持たせている。
- 36 BRETON, *Les Savans de quinze ans, ..., 2 éd.*, in-12, 2 vol., Tenon, 1829. 初版 (1811年) も同一の内容である。総頁数が705頁もある。表紙には、「36 planches, représentant plus de 150 sujets」とある。
- 37 著者は、「des ouvrages propres à inspirer à la jeunesse l'amour des connaissances utiles, et à perfectionner une éducation dirigée par des parens ou des instituteurs éclairées」(« Préface de la première édition » in *Ibid.*, p. I) を編集することを意図して、プランを練ったのであった。
- 38 DECOURCELLE (Ch. de), *Leçons de mythologie, ou Lettres à M^{me} ****. Ouvrage explicatif, faisant partie du complément de l'instruction de la jeunesse, in-8°, 272 p., Debray, 1807. « Madame »へ恭しさを堅持して、「je」(男性である著者自身)が神話についての手ほどきをする形式である。尚、Decourcelleについては、生没年など不詳だが、他に、彼による *Traité des symboles... Ouvrage indispensables aux littérateurs et aux artistes, qui donnent la clef de toutes les allégories...* (1806) という書物を、フランス国立図書館は所蔵している。
- 39 DURAND (Jean-Baptiste), *Lettres à Thémire sur la grammaire française, en prose et en vers*, in-12, 276 p., Dureuil, 1829 ou 1830. 本書の出版年が確定できないのは、表紙には「1830」とあるのに扉には「1829」とあるためである。Durand (生没年不詳) については、扉には「ancien premier commis de la recette générale du Haut-Rhin」とあるが、伝記辞典によると、文法家で詩人であるという。(*Dictionnaire de biographie française*, tome 12, 1970, p. 666 参照。)
- 40 DURAND, *Op. cit.*, p. vij, p. x.
- 41 BERTRAND, « Préface » in *Lettres sur la physique*, tome 1, 1824 参照。
- 42 BARON (J.), *Lettres à Julie sur la guerre de Troie*, in-18, xij-148 p., Laurent, Lyon, 1822. Demoustier 同様、巻頭に「Sexe aimable, sexe charmant」で始まる、女性に捧げる「ÉPITRE」(*Ibid.*, pp. 1-2) が、次いで、Julie に捧げる献辞代わりの詩、「A JULIE」も付いている。尚、Baron (生没年不詳) は、他に演劇作品なども発表している。
- 43 *Ibid.*, p. vij.
- 44 DURAND, *Op. cit.*, p. v, p. vj. この他、七月王政時代になっても、M. F. Chatelain (生没年

- 不詳)が*Lettres à Elize sur la mythologie comparée à l'histoire* (1831)を出し、これが元になっている*Lettres à ma sœur sur la mythologie comparée à l'histoire* (1839)を出版するなど、女性宛ての書簡集の形式を採る普及書が出た。尚、書簡体は、啓蒙効果を期待できる親しみ易い形式であることから、Bénoist(生没年不詳だが、表紙には、「ancien maître de pension」とある。)による*Manuel des instituteurs primaires, et des jeunes pères et mères de famille, ou Lettres à un jeune maître d'école sur l'importance de ses fonctions, les qualités qui doivent le distinguer, les devoirs qu'il a à remplir...*(1825)や、作家のGirard de Propiac(v. 1760-1823)による*Lettres d'un père à son fils sur l'histoire de France depuis l'origine de la monarchie jusqu'au règne de Charles X* (2 vol., 1826)など、前世紀同様、女性以外の人物に向けた書簡体の普及書も出版された。
- 45 ROCHELLE (Joseph-Henri FLACON, dit), *Code civil des Français, mis en vers, avec le texte en regard*, in-18, viij-484 p., Théodore Le Clerc, 1805. 読者対象は、「jeunes gens, qui, comme moi, ont embrassé la carrière de la Jurisprudence」(« Avertissement » in *Ibid.*, p. vij)である。Rochelle (1781-1834)は、「avocat au conseil du roi et à la cour de cassation」であると共に劇作家でもあった。(Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle, VIII, 1872, p.417 参照。)
- 46 ROCHELLE, *Op. cit.*, p. viij.
- 47 CLÉMENT, *Géographie en vers, ou La France décrite de manière à se pénétrer sans peine de ce qu'elle offre de plus intéressant*, in-8°, VI-32 p., l'auteur, Marseille, 1837. 分冊で出た最初の部分が国立図書館に残されている。その後の出版については、目下の所未確認である。タイトルの後に、「Ouvrage utile à toutes les classes de la société, et notamment aux voyageurs, aux négociants, aux jeunes personnes de l'un et de l'autre sexe qui ont besoin de s'instruire pour tenir dans le monde un rang plus ou moins distingué」とあり、女子も含めた幅広い読者層を対象にしていた。Clémentの生没年などについては、目下のところ不明である。
- 48 *Ibid.*, p. VI 参照。
- 49 FLÉCHE (Pierre-Joseph, abbé), *Petite Géographie méthodique de la France, en vers artificiels, comprenant les 86 départements sur 86 rimes différentes, avec des notes explicatives donnant des détails sur les traits historiques, les monuments, les personnages, etc., etc., dont il est fait mention dans les vers; et les possessions françaises hors d'Europe, aussi en vers, accompagnés de notes*, in-16, 48 p., Perisse frères, Paris et Lyon, 1838. 著者の生没年は不明だが、表紙には、「un professeur du petit séminaire de Chartres」とある。序文によると、著者は、自分達に託されている生徒達が、フランスの地理の勉強で確実に進歩するように「quelque moyen facile」を捜していたが、コンパクトに必要な事項を収め、「ces nomenclatures arides et assez fastidieuses」に楽しみと有益さを盛り込むことで、「しっかりと彼らの記憶に刻み付け」、ひどい間違いを予防するには、「celui[moyen] des vers techniques」が最も効果的であると考え、この形式を選んだという(*Ibid.*, pp. 3-4 参照。)。本書は、タイトルにもある通り、短い詩句での説明のそれぞれに対して、脚注に散文でやや詳しい解説が付されている。
- 50 LAMÉ-FLEURY (Jules-Ramond), *Cours complet d'histoire racontée aux enfants*, in-18, 18

vol., Dufard, 1829-1844. これは、聖史、ギリシャ・ローマ史、フランス史、イギリス史、アメリカ発見史などで構成された叢書で、度々再版されたものもあった。尚、Lamé-Fleury は、他に幾何学の普及書も出版している。